

國學院大學學術情報リポジトリ

郁達夫『文学概説』について：
有島武郎『生活と文学』との比較を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000888

郁達夫『文学概説』について

——有島武郎『生活と文学』との比較を中心に

大久保洋子

はじめに

民国の作家・郁達夫（一八九六―一九四五）の小説については、これまで既に数多くの研究が発表されており、日本文学とりわけ「私小説」との比較分析を始め、外国文学との影響関係についても大きな研究成果がある。だが小説に比べ、文学論に関する研究はさほど多いとは言えない。二〇〇七年に浙江大学出版社より刊行された『郁達夫全集』は、第十巻と第十一巻を「文論」上下巻として、創作後記や著作集自序、書評、劇評などを含む計百三十篇以上を収録している。この中で郁達夫が一定の紙幅をもって彼自身の文学観を著したものは限られているが、それらもまだ十分に調査されてきたとは言いがたい。『文学概説』（一九二七）はそのような文学論の一つである。

『文学概説』は郁自身が明らかにしているように、その内容の大部分を有島武郎（一八七八―一九二三）の文学論『生活と文学』（一九二四）に則っている。これまでの研究では、両者の関係について共通の見解が導かれている。

劉立善は白樺派と近代中国作家に関する比較研究の中で、『文学概説』と『生活と文学』の各章の内容を検討している。そのうえで、『文学概説』について「有島武郎が『生活と文学』で述べた観点の焼き直しで、彼自身はここから何ら新しい見解を打ちだしてはいない」としつつも、諸説ある文学論の中から西洋の文学者の論ではなく有島の論を引いていることそのものに郁の芸術観が表れているとし、主観的な抒情傾向の強い作家である郁と、自我に固執し内心の芸術的衝動を重視する有島の芸術論は「持ち味の上で極めて似通っている」と結論づけている¹⁾。

大東和重もほぼ同様の立場をとっており、『文学概説』は「有島の著書の『編訳』に近い形で書かれた。有島の論をわざわざ自身の文学論として発表したからには、何らかの共鳴があったと思われる」「書肆の求めに応じて、かつて触れた、あるいは手近な文学論を紹介したこともあったろうが、そこにはやはり郁なりの選択が働いていただろう」として、「自己表現の文学を訴える点で両者は一致している」と指摘している。⁽²⁾

これらの議論はいずれも両者の大幅な一致を認めたいうえで、郁が数多くの文学理論の中からあえて有島の論を選んだ点を強調し、それが両者の芸術観・文学観の一致に由来するものであるとの結論を導いている。この共通性の指摘は郁達夫の作品を「主観的、抒情的傾向が強い」とする先行研究の一般的な規定に則っている。筆者も基本的にはこの結論に同意するものであるが、より詳細に見れば、有島の論の中でも郁が重点的に、ほとんど逐語訳といえるほど全面的に採用している部分と、まったく採用していない部分に分かれている。郁は有島のすべての論を自説に導入したのではなく、ある一定の考えをもって取捨選択を行った上で、一部を取り入れる形で自らの文学論を書いていたのである。この点について分析することで、郁が『生活と文

学』の何に共鳴したのか、ひいては一九二七年の郁はどのような文学観をもって創作にあたっていたのかをより具体的に浮かび上げるはずである。

一 郁達夫『文学概説』と有島武郎『生活と文学』

『文学概説』は一九二七年八月、上海商務印書館より「百科小叢書第百三十七種」として刊行された。全六章からなり、このうち「第一章 生活與芸術」は、表題を「生活與芸術」(上・下)としてそれぞれ『晨报副鐫』一九二五年三月十二、十三日に発表された。郁達夫はその際に付した「書後」で、これらの文章の内容が有島武郎『生活と文学』に基づいていることを明かしている。さらに「第四章 文学的内在的傾向」第二段落、第十五段落は、表題を「文学的殉情主義」として『晨报副鐫』一九二五年四月十日に発表している。⁽³⁾ これらの文章の内容については後ほど詳しく見ていきたい。

有島武郎は一八七八年に大蔵官僚・実業家有島武の長男として東京に生まれ、学習院初・中等科に学び、新渡戸稲造の縁故で札幌農学校に入学した。内村鑑三の影響で

一九〇一年にキリスト教に入信する。卒業後、〇三年に渡米、ハバフォード大学、ハーバード大学に留学した。この頃からキリスト教信仰に疑いを持ち、文学に自己表現の可能性を見出すようになる。留学中はツルゲーネフやトルストイ、イプセン、クロポトキン、ゴーリキーを読み漁るほか、ホイットマンの詩に出会い感動する。〇七年に帰国後は、東北帝国大学農科大学（同年に札幌農学校から昇格）で英語を教える傍ら、北欧文学や社会主義の文献などを耽読した。一〇年四月、武者小路実篤や志賀直哉らと『白樺』創刊に参加、中心人物の一人として活躍する。一五年、農科大学を辞職して作家生活に入り、矢継ぎ早に作品を商業誌に発表して文壇の注目を集め、一躍流行作家となる。一七年、『有島武郎著作集』として創作集を新潮社から刊行。一九年には年来の課題であった代表作『或る女』前後編を完成する。だが二〇年頃より創作力不振に陥り、二二年、資本家としての自己改造を目的に、北海道の有島農場を解放する。二三年六月、長野県軽井沢の別荘で恋人と心中を遂げている。⁴⁾

『生活と文学』は会員制通信教育用教材『文化生活研究』第一巻第一号（一九二〇年五月十日）から第十二号（一九二二年四月十日）に連載された。一九二一年と二二

年には一部内容の入れ替えや削除を行い、再刊、再々刊されている。単行本は有島死去後の一九二四年二月二十日に文化生活研究会から出版された。内容は「緒言」ほか七章で構成されている。⁵⁾

『生活と文学』の連載当時、郁達夫は東京帝国大学に留学中であり、すでに日本語は堪能であったと考えられる。大学在籍中は授業にはほとんど出席せず、下宿で読書にふける生活を送り、その読書量は年間一千部に及んだとい⁶⁾う。東京帝大在学中に執筆した短編小説「南遷」(一九二二)には、主人公が有島の長編小説『或る女』(一九一九)を読む場面が描かれている。郁は同時代の読者の一人として早くから有島の名を知り、注目していたと考えられる。

だが『生活と文学』は会員制雑誌に掲載されていたことから、郁が留学中に読んでいた可能性はほぼ考えられない。単行本が出版された一九二四年二月、郁は創造社の活動拠点であった上海を離れ、北京大学に赴任していた。同年五月上旬には、創造社と太陽社の合作について創造社同人の郭沫若や成仿吾と話し合うため、北京から上海に赴き、半年ほど滞在している。二五年一月、武昌師範大学の招聘に応じて北京を離れ、武昌で「生活與芸術」を執筆していることから、上海で『生活と文学』単行本を入手した可能性

も考えられる。⁽⁷⁾ 郁は『晨报副鐫』に発表した「生活與芸術」の「書後」に、次のように書いている。

この「生活與芸術」は、武昌に着いてから編訳した最初の原稿である。近く編む予定の『文学概説』の緒言とするつもりだ。今回は慌しく南方に移動し、携帯した本が少ないため、実例を挙げる事ができず、内容が空虚であるとの誹りは甘んじて受けた。この稿が根拠としているのは、有島武郎の『生活と文学』冒頭の数章である。⁽⁸⁾

続けて、興味のある読者への参考書として、以下の書物を挙げている。

- 一 L.Hearn: Life and Literature.
 - 二 E.Carpenter: On Angels Wings.
 - 三 A.Henderson: Interpreters of Life and Modern Spirit.
 - 四 厨川白村著 魯迅訳『苦悶の象徴』
- このうち、一は小泉八雲（一八五〇～一九〇四）が一八九六～一九〇二年に東京帝国大学文科大学に勤務した際の講義録である。八雲の同種の講義録としては三冊目にあたり、前二冊は“Interpretations of literature”（一九一五）

および“Appreciations of poetry”（一六）である。後者は郁が単行本『文学概説』で参考文献に挙げている。

二は英詩人で社会主義思想家エドワード・カーペンター（一八四四～一九二九）の『天使の翼・芸術とその生活との関係に関する散文集』（一九二〇）で、大正期に邦訳が出ている。三は米数学者で演劇や歴史にも詳しいアーチボルド・ヘンダーソン（一八七七～一九六三）の著作で、一九一一年に出版された。

四は大正期に活躍した英文学者で文学評論家厨川白村（一八八〇～一九三三）の代表的著作である。厨川は東京帝大英文科で八雲や夏目漱石、上田敏らに学び、一九一五年にアメリカに留学、一七年に京都帝国大学英文科助教授、のちに教授となる。主な著作に『近代文学十講』（二二）、『文芸思潮論』（一四）、『象牙の塔を出でて』（二〇）、『近代恋愛観』（二二）などがある。大正時代（一九一二～二六）の批評家のうち、中国で最も多く翻訳され、影響が最も大きかった人物の一人に数えられる。魯迅訳『苦悶の象徴』は二四年二月に出版された。本稿では取り上げないが、『苦悶の象徴』は民国初期の知識人の間で爆発的に流行し、彼らの文学観の構築に深い影響を与えた書籍である。⁽⁹⁾

なお、単行本『文学概説』の巻末には参考書目としてさ

らに多くの書名が挙げられており、この中には英詩人で批評家マシュー・アーノルド『批評のエッセイ』、『文学のエッセイ』、英ジャーナリストで評論家ウォルター・バジヨット『文学研究』、英文学者横山有策『文学概論』などに並び、有島武郎『生活と文学』も入っている。

これらの参考文献のうち、『生活と文学』以外についての比較研究は管見の限りまだない。今後の課題であるが、ここでは郁が『文学概説』執筆にあたり全面的に参考にしたと考えられる有島武郎『生活と文学』について検討したい。

二 『生活と文学』の要旨と特徴

二・一 『生活と文学』要旨

有島武郎『生活と文学』各章の内容は以下の通りである。
〔緒言〕——生活と文学の関係について述べる。人間の生活にパンや知性、人間同士の親和が必要であるように、芸術もまた生活に必要である。生活とは個人の生活、ひいてはそれに充足と可能を与える家族生活を指す。現代の家族形式において個人は圧迫されている。文化の基調は個人

に還るべきであり個人が自由に生活しうる世界が即ち文化生活でなければならぬ。

〔一 生活の相〕——人間には自分の存在を持続させる衝動と、これを拡充し強固にする要求がある。生即ち本能がこの要求をさせており、生活とは本能の欲求、生の自己表現である。生活は全個性の表現であり、広義の芸術である。人間には自己表現の欲求があり、それには媒介物としての象徴が必要である。芸術家とは、純粹な象徴を用いて自己表現を純粹に行う人のことである。純粹な自己表現を行えない一般の人々にとって、芸術家は内部衝動の代弁者となる。芸術家は純粹で緊迫した態度によって生活と表現を一致させ、眞の創造を成就せねばならない。

〔二 芸術の相〕——人間はすべて芸術家であり、創造の欲求を持っている。人類の文化生活の発展はこの力による。だが人間は外間的現象に気を取られて芸術的衝動を軽視する傾向があり、芸術的衝動を満たす表現は完全には得られ難い。これを得るには表現様式を純粹にし、厳選された表現手段を用いる必要がある。芸術家の生活と表現とが一致した時、眞の創造が成就される。芸術的衝動以外の力によって技巧偏重に走るのは芸術の墮落であり、漫然たる遊戯にすぎない。

「三 芸術における文学の位置」——内部生活の表現に用いる象徴には、具象芸術（絵画、彫刻、建築、演劇、舞踊）と印象芸術（音楽、詩歌、戯曲、小説）がある。文学は印象芸術であり、なかでも詩歌は人間の文学的表現のうち最も原始的で高い価値をもつ。文学は悲劇と喜劇に大別される。人間の苦しい生活経験から生まれるものは悲劇的作品であるべきだが、優れた作品は肯定的で喜劇性がある。芸術家は鍛錬を進めこの境界に到達せねばならず、鑑賞者はこのような芸術によって生活を充実させねばならない。生活と文学の交渉がここまで緊迫した時、文学は初めて正しい効用を成し遂げることができる。

「四 文学の諸傾向 其一 内在的傾向」——人間生活には次の三つの様態と、各環境下で求められる文学表現がある。①過去を主にしている時…センチメンタリズム（宿命的、回顧的、詠嘆的、高踏的、悲観的）。人間の生活が行き詰った時や老衰期に起こりがちな生活環境で、人の現在が弱々しくなり前途に希望が薄らいだ時に起こる心の状態である。その時人は過去の栄華を現在の生活に織り込み空虚から逃れようとする。時代・社会においても同様で、残された活力が自己表現をする時、その対象となるのは過去である。②未来を主にしている時…ロマンチズム（情

熱的、空想的、伝奇的、破壊的）。役目を果たし終わった時代・社会がまだ生命力を維持し、さらに生活内容を更新しようとする時に起こり、人間の一生における青年期であり力の源である。③現在を主にしている時…リアリズム（統合性、力の感じ、健全性への示唆、構念の充実味）。現在の事象のみが活動対象であると認識し、不完全な世界の完成に向け努力するものである。時代・社会は成熟につれてリアリズムの傾向を帯びる。文学的にはマンネリズムや瑣末主義に陥りやすいが、リアリズムが本然の力に立てば、堅実で底力のある、人間の生活を根底から向上せしむる文学を生むことができる。

最上の文学作品を生み出すに適した傾向はリアリズムである。強烈な個性が出現するところには、その作品に現れるような現象が生まれ、在来の環境の方向を転換させる。内部の恒久性に重きを置くのが純文学であり、環境に重きを置くのが通俗文学である。別の時代の人間にも傑作とみなされるのは純文学の特色である個性内部からの欲求である。よって芸術の個性的要求が徹底、飽満、表現されたものを眞の文学として要求すべきである。

「五 文学の諸傾向 其二 表現的傾向」——文学の表

現形式には次の四種類がある。①クラシシズム(古典主義)：規模が雄大、整生の形式美、極端な感情の偏りが無い、荘重な言葉。平衡を重んじ、安定感がある。②ロマンチシズム(ロマン主義)：均衡調和に頓着せず、環境を軽視して自己内部の要求に重きを置く。自然主義に反対して生まれた後期ロマン主義は、人間の内在する能力を覚醒させ、伝説習俗から人を開放し、人間の生活に対して流動的な見方が成り立つようになった。③ナチュラリズム(自然主義)：ロマン主義が極端に走った頃に台頭した。自然主義運動によって人は初めて自分たちを客観視できるようになった。だが人間には純客観視は不可能であることや、人間の内部衝動を無視してその生活を宿命的なものとして断定したという欠点がある。④アイデアリズム(理想主義)：人為的な目的概念に向かつて人間生活を適合していくもの。理想主義において人間は常に向下的傾向を持ち、人間本然の赴くままに放置すれば必ず退縮すると断定される。現在の人間に理解できない超越的で絶対的な真善美の力が人間に作用し、人間はそれを信賴し、現在の境涯を乗り越えて進むのが理想主義的態度である。しかし理想主義は現在の生活に對する否定であり、人間を無価値なものとする欠点がある。

「六 文学の諸傾向 其三 具体的傾向」——芸術とは

表現そのものである。実用的な意義なしで内部の痛切さを表現することが芸術的表現であり、言語の發展と生活の複雑化によって芸術的発声からは遠ざかった表現を、純一な形に返そうとするのが芸術家の仕事である。この意味から言えば詩の形式が最も成功している。小説や戯曲には実用的な言葉が用いられているために乱雑な内容が付帯しており、芸術としては物足りない。戯曲は演劇によって十分に表現できず、小説は人心の平面的または分解的記述によってのみ成り立ち、芸術的衝動の端的な発露からは遠い。自分「有島——論者注」は戯曲や小説という表現法を選びながらも、常に詩歌を考え音楽に憧れている。

「七 文学の鑑賞」——文学は人の内部に潜む大きな衝動をそのまま表現しようとする。その表現は説明的平面的ではなく、有機的総合的な生きたまの表現でなければならぬ。外界の刺激の再現ではなく、刺激に対する本能の働きを端的に表すのが文学者の使命である。文学は、外界の事情の奥に潜む衝動即ち人間の生命の中軸をなす本能を表現する。文学はそれを有機的な姿で表現し、人は現在の道徳、習慣、制度を超越して本能の力に触れ、そこに生命の躍進を促す暗示を純粹な形で受け取ることができる。これのみが文学の目的であり価値である。文学は本能の自己

表現そのものに目的と価値を持ち、その点において生活に對して正しい角度を以て嚴存することができる。

二・二二 『生活と文学』と大正生命主義

前節で見た『生活と文学』における文学の定義を一言で概括すると、「文学とは人間の内的衝動を純粹な形で表した自己表現である」ということになる。その根底に流れる大きな思想的特徴として、大正生命主義の影響を指摘することができる。

鈴木貞美によると、「生命主義」の語は、哲学者田辺元（一八八五〜一九六二）が一九一九年に発表した「文化の概念」（『改造』三月号）の中で、当時の思想の支配傾向として挙げたものである。これは独哲学者リッケルトが、ベルクソン（一八五九〜一九四二）やジェイムズ（一八四二〜一九一〇）、デューイ（一八五九〜一九五二）らの当代哲学の根底にあると指摘した思想「Biologismus」の訳語である⁽¹⁾。

鈴木によれば、「生命」の語は、本来は「天から授かった素質と寿命」を意味する漢語「性命」が、明治期に移入された *Life* の訳語「生命」や、和語「いのち」と結びついて同一化し、「重要、核心的な要素」といった意味合いで

用いられるようになった⁽²⁾。ここにベルクソンの生命哲学や、キリスト教スピリチュアリズムからくる宇宙的生命の理念の移入と流行が加わり、「生命」の概念は大正期の思想の支配傾向となつていったという⁽³⁾。

鈴木は田辺の指摘を踏まえ、大正期の個人主義といわれる思想の根底には「生命」という観点があり、大正文化界を席卷した「文化主義＝教養主義」の実態は、「生命主義」の立場に於ける文化」だったと指摘する。生命の発現こそが文化創造の原基であるという思想の下に大正教養主義があり、この構造において、『生命』の語は「大正期の日本の思想界の、いわばスーパー・コンセプトの役割を演じていた」という⁽⁴⁾。

有島武郎における大正生命主義の影響について考える際に、特に注目したいのはベルクソンの生命哲学とのかかわりである。

日本では、西田幾太郎（一八七〇〜一九四五）が一九一〇〜一一年に相次いで『ベルクソン哲学の方法論』と『ベルクソンの純粹持続』を発表した。西田は一五年、ベルクソンの純粹持続説と独新カント派哲学者リッケルト（一八六三〜一九三六）らの純理論派の思想を結びつけた独自の哲学体系の構築を主張した。続く二一〜一五年には、

ベルクソンに関する著作や翻訳が次々と出版された。管見によれば、この三年間に出版されたベルクソン関連の書籍や論文は十三本以上である¹⁵⁾。

「生命」に関する言説も時代を席卷していた。一九一三年二月、大杉栄（一八八五―一九二三）は「生の拡充」を発表し、「生と云ふ事、生の拡充と云ふ事は、云ふまでもなく近代思想の基調である」と述べている¹⁶⁾。同年四月、片上伸（一八八四―一九二八）は「生みの力」で、「吾々は自分の生命を僅かに保存し意識することだけで満足することとは出来ない。吾々は自分自らの力によって、自分自らの力を増大することによって、新らしき創造を営まなければならぬ」と語る¹⁶⁾。同年九月、白樺派の柳宗悦（一八八九―一九六一）もベルクソンの理論を踏まえて、生命の問題に関する長編論文を発表し、「すべて芸術は学説より造られない、彼は生命の直感を出発とする。学説は決して活きた生命を産まない」と述べた¹⁷⁾。一四年一月、西洋画家の石井柏亭（一八八二―一九五八）と高村光太郎（一八八三―一九五六）、文芸評論家の本間久雄（一八八六―一九八二）との間で三つ巴の「生命」芸術論争が展開された。評論家の相馬御風（一八八三―一九五〇）はこの一年を通して、「生命」と「生活」に関する考察を連続して発表した。作家や

評論家は自らの作品や文章で「生命」、「生活」、「自我」に関する問題を考えていった¹⁸⁾。

有島武郎は渡米中にベルクソンの哲学に出会い、大きな影響を受けた。有島が帰国後、執筆活動を開始した当時の大正文壇では、まさにベルクソンの哲学および生命主義思潮が大流行していた。有島も一九一三年にはベルクソンの哲学についての講演を行っている。二〇年には自らの生命哲学をまとめた「惜みなく愛は奪ふ」を完成させ、この中でベルクソンの「本能」を称揚している²⁰⁾。また生命主義思想は彼の創作面においても深く浸透していた。長編小説『或る女』は、野性的な男性との恋愛に溺れ破滅していく女性を描いているが、鈴木貞美は、ここにベルクソン「エラン・ヴィタール（生の躍動、生命の飛躍）」の影響があると指摘している²¹⁾。有島が『生活と文学』で繰り返し強調する「生命の表現としての芸術」という観点は、「自己表現としての文学」という一点にとどまるものではなく、その根底には生命主義思想への深い傾倒があったといえよう。

三 郁達夫『文学概説』の概要、『生活と文学』との相違点

三・一 郁達夫『文学概説』概要

郁達夫『文学概説』の概略は以下の通りである。

「第一章 生活與芸術（生活と芸術）」——生活はなぜ芸術を求めるか、生活に対する芸術の影響とは何か。生活を構成するのは「生」即ちすべての存在や現象の原動力である。個人が「生」の力によって存在を保つこと、これが「生」の力の具象化であり、その表現は創造である。すべての行動が我々の自己表現であり、生活の全過程が広義の芸術である。自己表現には象徴と呼ばれる媒介物が必要である。芸術家とは最も純粹な自己表現を行う人である。彼は自己の欲求とともに一般人の芸術的衝動をも満たす。芸術家が衝動と表現、芸術と生活を緊密に一致させられず、実感と作品を同一化できなければ、芸術の墮落が始まる。

「第二章 文学在芸術上所占的位置（芸術に占める文学の位置）」——芸術とは生の要求の表現だが、外部の空気や社会制度、道徳、習慣の妨げにより、内的要求は完全に表現できない。人は芸術家の天才に、自分に代わる純粹な

表現を託す。芸術表現は象徴によらねばならない。古来の芸術家は、象徴によって異なる表現をとる。プラトンは芸術を靜的（彫刻、絵画）と動的（音楽、詩歌）とに分類した。独ハーゲルは主観性、客観性、歴史性の三基準で分類した。独ハルトマンは形美芸術、附属芸術、自由芸術、複合芸術の四種に分けた。ここでは有島武郎の分類法によって具象芸術（創造者の内部生活の具象化。彫刻、絵画、建築）と印象芸術（非具象的な表現）の二種に分けた。文学は印象芸術であり、その特色は、鑑賞者の感情に作用を起し、その後具象化された作用をもたらし、感覚に入り込む。

「第三章 文学的定義（文学の定義）」——物事に定義を下すことほど難しく愚かなことはない。しかし古今東西で多くの人がこれを行っている。

魏文帝『典論』、晋摯虞『文章流別論』、陸子衡『文賦』、劉勰『文心雕龍』いずれも内容はほぼ同じである。これら中国古代の文人の解釈をここでいう文学——外国語 literature の訳語に当てはめるのは間違っている。そこで外国人の文学に関する言をみれば、アリストテレス『詩学』、デイオン・クリソストモス、シェークスピア、マシュー・アーンノルド、ヘンリー・ハラム、ヘンリー・トマス・バツクル、トマス・ド・クインシー、トルストイ、シェリー、

ミルトン、コールリッジらがそれぞれ文学について定義づけを試みている。

「第四章 文学的内在的傾向（文学の内在的傾向）」——文学の内在的傾向とは作品の色彩のことであり、作品が生まれた時代の傾向によって決定される。生活傾向とそこで求められる文学表現は、①過去中心…センチメンタリズム（憂鬱の悲哀と嘆き、旧事への未練、宿命への怨嗟）、②未来中心…ロマンチズム（情熱的、空想的、伝奇的、破壊的）、③現在中心…リアリズム（健全性、力の表現、構念（conception））の三種に分けられる。リアリズムは最も健全な性質に富む。リアリズムを基礎とし、ロマンチズムの新鮮さを加え、センチメンタリズムの抒情性をもった文学作品が最高の価値を持つ。生活に対する環境の影響は大きい。偉大な個性は環境の支配を受けない。内部の根本的要求に忠実になり、環境の圧迫を受けないのが天才の根本である。芸術家にも天才と凡才があり、芸術作品にも通俗と芸術がある。通俗小説は環境の支配下にあり社会の表面的な物語を描く。文芸小説は環境を顧みず、人心の奥にある人類恒久の傾向を描く。芸術の創造の真意は文芸小説にあり、通俗小説にはない。これが文芸に従事する人の責任と意義である。

「第五章 文学在表現上の傾向（文学の表現上の傾向）」——文学の表現上の傾向は、歴史的にみると古典主義、ロマン主義、自然主義、理想主義がある。

「第六章 文学的表現体裁之分類（文学の表現体裁の分類）」——生物の発声は自己と種族の保存・繁栄のためだが、痛み、喜び、美しい風景や物事に声を出す非実用的な発声は人の内部の要求を表現する。これが芸術の表現である。この点において文学のジャンルは詩が最も純粹である。英批評家モルトンは純文学（詩）を創造の文学、記述文学を科学の文学と位置づける。純文学は発声と意味の二要素の組み合わせにより、音声重視の抒情詩（Ode、Sonnet）、民謡」と意味重視の叙事詩（小説、短編小説（Romance））に分けられる。これに動作を加えたものが演劇である。純文学は創造の文学であり、無から有を産む。記述文学は既にあるものに評論を加えて確かな知識を得ようとするもので、歴史や哲学がこれである。だが文学の分類に絶対的な基準はなく、分類ができない作品もある。各種の文学の特質については他の多くの詩論や小説論、演劇論が書いており、そちらに譲りたい。

三・二 『文学概説』と『生活と文学』の相違点

前節で見た『文学概説』について特徴をあげていくと、まず有島武郎の大正生命主義の影響はほぼそのまま踏襲されており、論の流れも有島をなぞる形で中国語に移し替えられている。『文学概説』第一章では、『生活と文学』の一、二の内容を大筋でほぼなぞっており、有島の文章をそのまま中国語に移し替えたと思われる部分も非常に多い。両者の異なる点は、有島が引いたドストエフスキーやストリンドベルグ、池大雅などの例は『文学概説』にみられず、郁は代わりに先駆者としての芸術家の役割を強調していることである。これは郁が『創造季刊』第一巻第一期で発表した論文「芸文私見」の論旨に共通しており、孤高の天才が芸術を導いていくという郁の初期の芸術観は、一九二七年に至っても変化が起きていないようである。

逆に郁は、芸術家の役割を強調しているほどには、「生」の定義や「生の力」について強調せず、有島の論をそのままなぞるのみである。だが郁においても「生の力」は明らかに自己表現を支え自己表現の衝動を説明する論拠として位置づけられ、割愛されることなく説明されている。生の表現としての文学や個性の表現は十分に強調されている。

この第一章は単行本化に先立って発表されていることから、郁としては特に主張したい内容だったと考えられる。

第二章では、プラトン、ヘーゲル、ハルトマンの芸術分類法を紹介し、それぞれの短所を指摘した後、「自分は有島武郎の論を取りたい」として、具象芸術と印象芸術という有島の分類法を紹介する。ここでは有島が『生活と文学』で提示した二分法の図解をそのままの形で掲載しているが、分類法については前三者および有島の説いずれも簡単に触れるのみである。

第三章では古今東西の文学者による文学の定義を列挙する。郁独自の内容であり、『生活と文学』には見られない。だが最終的には、サミュエル・ジョンソンの言を引き「一つの定義でもって詩を囲い込むことは、定義を下す人の狭隘さを示すだけだ」として、定義づけの無意味さを示して章を終えている。読書家の郁らしく引用は多岐にわたるが、これらの膨大な引用をまとめて結論を出すことはしていない。

第四章では、過去・現在・未来という人間生活の三つの様態と、各々の傾向下で求められる文学について述べる。これらの内容およびこれに続く「時代の環境を乗り越え時代を創造する強烈な個性」、「通俗文学と純文学」について

の論は、例示された文学作品の相違はあれど、いずれも『生活と文学』の記述そのままといつてよい。

このうち『晨报副鐫』に先行発表した部分は、過去に目を向けた文学ニセンチメンタリズム（殉情主義）についての論である。

第五章では、『生活と文学』をほぼ踏襲する形で文学表現の変遷（古典主義／理想主義）を解説する。論証の流れだけでなく、例示する文学者もほとんど有島が挙げた通りである。

第六章は一部が有島の論に則った記述である。芸術を「非実用的な表現としての叫び」と定義づけ、それを純粹化するるのが芸術家の役割だと規定するのは有島と同様である。

有島はこの表現の純粹性に基づいて詩歌を称揚し、散文的表現への不満を告白している。だが郁は詩歌の純粹性についてはわずかに触れるだけで、主に英文学者モルトン『文学の近代的研究』（一九一五）に基づき、純文学を抒情詩（音声重視）と叙事詩（意味重視）に分類して論じる。郁は芸術についての有島の見解に同意はするものの、詩歌を至高の文学とみなす意見には賛同できなかったようだ。

郁達夫は生涯にわたって旧詩を書いており、作品数からみれば彼が書いた旧詩の数は小説を遙かに上回っている。

新詩に至っては、一九二一年に書いた散文詩「最後の慰安也被奪去」一篇と著作集題辭二篇を除けば、シンガポール時代に書いた校歌の歌詞などがあるのみで、ほぼ書いていないといつてよい。

『文学概説』第三章は、一見、古今東西の文学者の言を引いただけで、郁自身は何の見解も示していないように見えるが、その中で「中国古代の文人の解釈を持ってきて、無理矢理に今ここで語る文学に当てはめるのは間違っている。なぜなら孔子のいう文学とは文章博士の意であり、ここでいう文学とはLiteratureの訳語だからだ」という記述から、わずかに彼自身の文学観が垣間見える。郁における「文学」とは旧詩に代表される中国伝統文学ではなく、近代文学であり、彼にとつては小説こそがその代表だった。このような郁にとつてみれば、詩歌を至上とする有島の見解にはただちに同意しかねるものがあつたのだろう。

以上『文学概説』を概観すると、その内容は有島武郎『生活と文学』の論旨をほぼ踏襲しつつ、一部に郁達夫自身の見解や例示を挿入したものと見えるだろう。だが郁は自身自身の見解を發展させ、独自の結論を導くことはなかった。第三、六章には独自の記述が比較的多く見られるが、いずれも文末では「人によつて分類の違いがある」として断定

を避けており、論の終わり方としては唐突な印象がある。明らかに第一、四章ほどの力が入っておらず、お茶を濁している感がある。単行本化に先んじて第一章と第四章の一部を発表したことから考えても、この部分こそが郁の主張したいことだったと考えられる。

また、第四章のうち、先行発表したのは過去に目を向けた文学すなわちセンチメンタリズムについて論じた箇所である。この部分だけを先に著したことから、郁は三つの生活様態および文学表現のなかでも特に過去を中心とした生活様態と文学を強調したい意図があったといえる。これについては、次章で郁自身の小説の創作傾向と比較しつつ考えてみたい。

四 郁達夫の初期小説の叙述の特徴

本稿末尾の表は、郁達夫が一九一九〜二四年に執筆・発表した小説作品とその叙述方法をまとめたものである。ここには散文や旧詩、論文は含まれていない。表中の「錯時法」とは、物語が語られる時間の流れを示したものである。「先説法」は予言的に物語内容にあらかじめ触れてから語る方法、「後説法」は物語の内容を後の時点から振り返って語

る方法で、後説法の作品では主に回想によって物語が進行する。「なし」としたのは物語と語りが同時に発生しているものである。²³⁾

作品全体の傾向をみると、郁の初期小説には後説法の作品が非常に多いことが分かる。後説法はさらに、語りの時間の動きによって分類することができると、

未完の三篇を除いて語りの時間にもとづく物語構造を分析すると、次のようになる。

まず物語内容を後の時点から振り返る後置的な語り(a)は、「現在」から振り返って語られ、「現在」に戻る作品(a-1)と、不明の「現在」から振り返って語られ、「現在」に戻らない作品(a-2)に分けることができる。

a-1は「現在」の情緒を強調する語りであり、ある物事を経て変わった自分の視点から、変わる前の無垢の過去を見る、または変わり果てた自分の姿と末路を読者に示すものとなっている。このような作品は十編である。

a-2は過去の情緒や特定の人物にスポットをあてる語りであり、二篇がある。

そのほか、物語内容と物語行為が同時発生する同時的語り(b)が五篇、物語内容の起こる前に予言的に叙述する前置的語り(c)が「銀灰色の死」一篇である。「銀灰色の死」

は先説法を取ると同時に後置的な語りも差しはさまれる形をとっている。

以上を分析すると、郁達夫の小説は、初期の創作を通して後置的な語りが多く、未完・未発表の三篇を除いた十八篇中十二篇がそれであることがわかる。

また、後置的な語りを採用した作品は、過去の経験が主人公の「現在」に重要な影響を及ぼし、「現在」の様相を規定する内容になっており、このような語りの役割としては、主人公の背景を補足説明し、物語内容を決定し、主人公の運命を規定し、強調すること、すなわち「今の自分」の発生源と意味を付与することと考えられる。

なお中期・後期の作品については本稿執筆時点で分析が終わっていないが、後説法を多用する、すなわち過去に目を向け、過去への未練と悔恨を描くという郁の創作傾向は、一九二四年までの作品に強く見られる傾向であるといえよう。これは有島が『生活と文学』で論じた「過去を中心とした生活およびそこで求められるセンチメンタルな文学表現」と一致している。創作時期からみて、郁が有島の論を受けてこのような小説を書いたとは考えられず、むしろこのような作品を数多く書いてきた郁は、有島の文学論を読んだ際に、わが意を得た思いがあったのではないだろう

か。それは郁自身の創作の経緯を理論的に後付けするものであったといえる。また、郁は生命主義思想が席卷した大正期に日本に滞在した経験から、生命を根底に置いて文学をとらえる有島の考えに深く共鳴し、これを中国に紹介することを意図したと考えられる。

五 おわりに

本稿では、郁達夫『文学概説』と有島武郎『生活と文学』を比較し、両者の共通点と相違点から浮かび上がる郁達夫の文学観について検討した。有島は「大正生命主義」の形成と展開に大きな役割を果たしたベルクソンの生命哲学に深く傾倒し、これをもとにした自身の文学観を『生活と文学』に著した。このなかで有島は「文学とは生の表現である」と定義づけ、人の内的衝動を純粹に表現したものが至高の文学に詩歌であると位置づけた。郁は生命主義にもとづいた有島の文学観をほぼそのまま自著に移入したが、彼自身は詩歌の価値を強調することはなく、むしろ強調したのは過去を中心とした生活傾向を写すセンチメンタルな文学表現であった。郁は小説執筆当初から、過去への未練と悔恨を作品に強く表しており、このような創作傾向をもつ

郁は、有島の文学論、とりわけ過去中心の生活とセンチメンタルな文学との関係を論じた部分に強く共鳴したと考えられる。

本稿で触れられなかった郁の中期と後期の作品分析については、彼の小説創作全体を俯瞰するうえでも重要な作業

と考える。今後引き続き進めていきたい。
また中国近代文学における生命主義の影響については、すでに一部の優れた論考が著されているが、全体像はまだ明らかにされていない。これについても引き続き検討する必要があるだろう。

タイトル	執筆時期	発表時期	錯時法	備考
両夜巢	1919.2~4	未	後説法 a-1	在日中国人の滑稽な様相、留学生と旅館の女中の交情
円明園の一夜	1920.6.3	未	なし	八高同級生との同人誌に掲載を予定し日本語で執筆。『郁達夫全集』に一部公開。留日学生の生活と孤独
銀灰色的死	不明	1921.7.1 ~9.13	先説法 c 後説法	妻を亡くした留学生のすさんだ生活と死
沈淪	1921.5.9.改作	1921.10	後説法 a-1	異郷で孤独に苦しむ留学生の煩悶
南遷	1921.7.27	1921.10	後説法 a-1	失恋の過去を背負った留学生の療養生活と失望
茫茫夜	1922.2	1922.3	後説法 a-1	帰国した留学生の退廃した教員生活
懐郷病者	1922.4.2	1926.4	後説法 a-1	帰国した留学生の無気力な心理の断片

風鈴	1922.7改作	1922.8	後説法 a-1	一九三五年『達夫短編小説集』収録時「空虚」に改題。恋愛・帰国・就職に失敗した留學生の虚無感を描く
秋柳	1922.7初稿、 1924.10改作	1924.12.14、 16.24	なしb	「茫茫夜」続編。就職在籍中、妓楼での放蕩生活を描く
血泪	1922.8.4	1922.8.8 ～13	後説法 a-2	帰国し職探しに奔走する境遇。文学研究会の「血と涙の文学」を挿入
春潮	不明	1922.11	なし	未完。ある男女の人生を伝記的に描写
采石磯	1922.11.20	1923.2	後説法 a-1	胡適との翻訳論争を受けて書く。清代の不遇の詩人・黄仲則（一七四九～八三）に作者自身をなぞらえる
葛羅行	1923.4.6	1923.5	後説法 a-1	安慶の教職を辞し妻子を故郷に帰して一人上海に残り、虐待した妻への懺悔を告白体で綴る
青煙	1923.旧暦5.10	1923.6.30	なしb	失業し故郷に帰れない現在から予見した将来の情景を挿入
春風沈酔的晩上	1923.7.15	1924.2	後説法 a-2	失業し上海の貧民窟で暮らす青年と女工の友情
秋河	1923.旧暦7.5	1923.8.19	後説法	未完。米留学から帰国した少年と義理の母の恋愛
落日	1923.9.10	1923.9.16	後説法 a-1	失業中の自分を訪れた友人Cへの友愛
離散之前	1923.9	1926.1.10	なしb	創造社解散の情景を予見して書く
人妖	不明	1923.12.1	なしb	母からの抑圧に苦しむ少年の一日
薄奠	1924.8.14	1924.12	なしb	北京の人力車夫との友情
十一月初三	1924.旧暦11.3	1924.12.13 ～1925.1.3	後説法 a-1	誕生日の一日をユーモラスに描く

注

- (1) 劉立善『日本白樺派與中国作家』、遼寧大学出版社、一九九五年、第九二〜九三頁
- 原文・郁達夫的此一番理论、主要是有島武郎在《生活与文学》中阐述的观点之翻版、他自己并未由此提出些什么新见解／两神意识、在神韵上是如此地近似。
- (2) 大東和重『郁達夫と大正文学——自己表現』から自己實現の時代へ、東京大学出版会、二〇二二年、第一二五頁
- (3) 『郁達夫全集』第十卷、浙江大学出版社、二〇〇七年、第三一四頁
- (4) 『日本大百科全書』第一卷（小学館、一九九四年）、『有島武郎全集』別卷（筑摩書房、一九八八年）による。
- (5) 『生活と文学』のテキストは『有島武郎全集』第八卷（筑摩書房、一九八〇年）を使用した。
- (6) 郁達夫の日本留学時代の読書体験については、注（2）前掲書、第二章に詳しい。
- (7) 郁達夫の著作および伝記資料については、伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫『郁達夫資料』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、一九六九年）、『郁達夫資料総目録附年譜』下（同、一九九〇年）を参照した。
- (8) 注（3）、前掲書、第三一四頁
- (9) 厨川白村と中国近代文学の關係については、工藤貴正『言語圈における厨川白村現象——隆盛・衰退・回帰と継統』（思文閣出版、二〇一〇年）に詳しい。本稿のちに述べる大正生命主義思潮についても、工藤は既に幾つかの論考で民国文人との關係を考察している。
- (10) 鈴木貞美『大正生命主義と現代』、河出書房新社、一九九五年、第四頁。なお生命主義に關する鈴木の一連の成果には、ほかに『生命』で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開（日本放送出版協会、一九九六年）、『生命觀の探求——重層する危機のなかで』（作品社、二〇〇七年）、『日本人の生命觀——神、恋、倫理』（中央公論新社、二〇〇八年）などがある。
- (11) 注（10）、前掲書、第一九頁、『生命』で読む日本近代』第三九〜四〇頁
- (12) 注（10）、前掲書、第一九〜二二頁
- (13) 注（10）、前掲書、第四〜五頁
- (14) 一九二二年・川合貞一「オイケンとベルグソン」（『人生と表現』

- 七月号)、桂井当之助「生命中心の思想」(『早稲田文学』七月号)、
 広瀬哲士「生の進化」(『三田文学』第一号)。一九一三年・錦田
 義富訳「ベルグソンの哲学(形而上学入門)」(『警醒社』、金子馬
 治(築水)、桂井当之助訳『創造的進化』(早稲田大学出版部)。
 一九一四年・西田幾多郎序・高橋里美訳『物質と記憶』(星文館)、
 稲毛祖風・市川虚山『ベルグソン哲学の真髓』(大同館書店)、
 北吟吉「時間と自由意志・哲学入門」(南北社)、広瀬哲士訳「笑
 の研究」(慶応義塾出版局)、野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』(大
 同館書店)、中沢臨川『ベルグソン』(実業之日本社)、北吟吉「物
 質と記憶・創造的進化」(南北社)、徳富蘇峰、伊達源一郎「ベ
 ルグソン」(民友社)
- (15) 大杉栄「生の拡充」『近代思想』、一九一三年二月。引用は『編
 年体大正文学全集』第二卷大正二年、ゆまに書房、二〇〇〇年、
 第四七五頁。
- (16) 片上伸「生みの力」『早稲田文学』、一九一三年四月号。引用
 は注(15)、前掲書、第四五八頁。
- (17) 柳宗悦「生命の問題」『白樺』、一九一三年九月号。引用は注
 (15)、前掲書、第五一六頁。
- (18) 以上は『編年体大正文学全集』別卷(ゆまに書房、二〇〇三
 年)による。このほか、日本におけるベルクソン受容について
 は、郡司良夫「わが国におけるベルクソン受容史についての試

郁達夫『文学概説』について

- 論——文献目録を手掛かりとして」(『松山大学論叢』第二五卷
 第五号、二〇一三年)、近代日本及び五四期中国におけるベルク
 ソン受容については白井澄世「五四期におけるベルクソン・生
 命主義に関する一考察——瞿秋白を中心に」(『東京大学中国語
 中国文学研究室紀要』第十号、二〇〇七年)が詳しい。
- (19) 「年譜」『有島武郎全集』別卷(注(4)、前掲書)
- (20) 『有島武郎全集』第八卷、注(5)、前掲書
- (21) 注(10)、前掲書、第二三頁
- (22) 注(3)、前掲書、第三三四頁
- 原文…这些中国古代文人所下的解释，现在若把他们拿来，勉
 强用在现在我们所讲的文学两字上去，却有点不对。因为孔子
 所说的「文学」是「文学」，是文章博学的意思，而现在
 我们在这里所说的「文学」，是外国文Literature的译语。
- (23) 物語時間の分析手法と用語は、ジェラルド・ジュネット著、
 花輪光、和泉涼一訳『物語のディスクール——方法論の試み』(書
 肆風の薔薇、一九八五年)を参考にした。
- (24) 未完の「春潮」「秋河」および本稿執筆時点で全体が発表され
 ていない「円明園の一夜」は分析から除外した。
- 〔キーワード〕 郁達夫、有島武郎、文学観、大正生命主義、日中比
 較文学